

新婦人福島県本部、福島農民連産直農協が余目町農協で研修

「元の福島を返せ」、「がんばれ！福島」の交流 余目町農協が福島農民連産直農協を支援決定

震災、原発事故から半年



9月9日、新日本婦人の会福島県本部と福島農民連産直農協の両組織38人が山形県余目町農協を訪問し、米の栽培についての現地研修会を開催しました。

これは津波、原発事故により福島県内の産直米の確保、小さな子供を抱える新婦人会員からのより安心な産直米の要望に応える取り組みとして、7月26日に福島県農民連産直農協が山形県余目町農協に米の出荷要請を行ったことによります。

歓迎のあいさつに立った余目町農協の森屋要二組合長は「震災からちょうど半年がたったものの復旧、復興がなかなか進んでいない。新婦人福島県本部、農民連の皆さんの大奮闘でこそ展望が見える。この二つの団体と当農協が提携しての米の取り組みが、復興への大きな励みになることを期待している」と述べました。

福島農民連産直農協の松川正夫組合長は「福島県の農民、消費者の複雑な気持ちがあっ

て、余目町農協に米の出荷を依頼することとなった。余目町農協が福島県の実情を深く汲み取って私たちの要望を受け入れてくださったことに心から感謝したい」とあいさつしました。

両農協の関係を仲介した日販連の中塚専務は「一日も早い復興によって、福島県の農家が福島で米を元気に栽培して産直ができること、新婦人のみなさんが福島県の米を安心して食べられるようになることが私たちの目指すところである。どうしても汚染されていない米が欲しいというお子さんを抱えるお母さんの声に応えることに余目町農協が少しでも役に立てるなら」と経過報告をしました。

参加者を代表して、新婦人福島県本部の井上裕子会長は「原発事故によって、このままでは福島県には子供がいなくなってしまう。新婦人は福島の米を食べることで産直運動を発展させてきた。子供をどう守るかを考えれば、今回の余目町農協に安心できる米を提供いただき、母親の切実な声に応えていきたい。農民連と新婦人の産直を断ち切ったのは東京電力であり、原発事故は本当に悔しい。農民連、余目町農協との提携で足元からの運動をもっと発展させなくてはならない。」

この後、余目町農協の米担当者から、農協の特別栽培の特徴についての説明が行われました。担当者は「当農協は人づくり、土づくり、米づくりを大切にしてきた。未合併の小さな農協なので、農協と組合員の距離は短く、組合員が団結して取り組んでいるところが大きな特徴である」と説明しました。

説明会に続いて、余目町農協カントリーエレベーター、収穫直前のはえぬきの栽培圃場の視察を行いました。



米の研修会の後に、庄内町の風力発電の現場を訪問し、町の担当者から説明を受けました。遠くからは小さく見えても、高さ65m、プロペラが35mという実物の大きさ、ね回転の速さに参加者一同驚いて聞き入っていました。特別に風車の柱の中を見せてもらい、町内の利用、売電事業の状態、今後の自然エネルギーのあり方を学びました。



「ふるさと産直みほん市2011」開催決定

被災をのり越え、収穫の喜びを多くのみなさんと

毎年の企画として定着した「ふるさと産直みほん市2011」ですが、今回は展示に加え即売も実施します。地産地消、安全、安心を推進してきた全国の産地直組織が被災地の復興と日本農業の未来のために一堂に会します。自然エネルギー機器の展示も予定しています。特別セミナーとして野口邦和先生(放射線防護学)の講演もあります。

今から日販連会員、取引産地の参加の準備をお願いします。

日時 11月22日(火)午前11時～午後5時

会場 東京流通センター

主催 農民連ふるさとネットワーク

農民運動全国連合会

日本販売農業協同組合連合会